

24	みよし	みよし市立天王小学校	ヒガシガワ ハヤオ 東 川 隼 大
----	-----	------------	----------------------

分科会番号	21	分科会名	「特別の教科 道徳」特別分科会
-------	----	------	-----------------

困難に対して前向きに挑戦しようとする心を育む道徳教育 ～自己と向き合う道徳科の実践を通して～

1 主題設定の理由

本学級の児童は元気で明るい児童が多い。一方、何事にも前向きに取り組む児童が多い中で、取り組んでいることに躓いてしまうと、自分ではできないとあきらめてしまったり、他人や自分に怒れてしまったりする児童もいる。加えて、自信がないことには、進んで挑戦しようとする児童も少ない。そこで、道徳の授業をするにあたり、内容項目A（主として自分自身に関すること）の道徳的価値に対して、自分自身に向き合う心に焦点を当てた。自分と向き合うことで、自分の考える強い意志を確立し、そこから、学級で取り組み、協力することのよさを実感してほしいと考えた。また、個人の心に向き合うことで、結果的には、「困難なことから回復する力、立ち向かう力」のことを指すレジリエンスの高まりも見られるだろうと考えた。道徳の目標にもあるように、1時間の道徳の学習だけで完結するのではなく、内容項目Aで実践した道徳の学びと、学級で取り組んだ8の字跳びや日々の生活の様子とを関わらせながら、児童たちの意識を向上させたいと考え、上記のように研究主題を設定し、実践を行った。

2 目指す児童像

- ・自分自身と向き合い、課題解決に向けて粘り強く取り組む児童

3 研究の構想

(1) 研究の仮説と手立て

【仮説】

登場人物の困難に立ち向かう際の心のあり方を考え、よさを実感することで、課題に対して、粘り強く解決しようとする姿勢を育むことができるだろう。

手立て①

【困難に立ち向かう際の心のあり方を考えられるように「ゆさぶり発問」を投げかけて「なりたい自分」について話し合う場面を設定する。】

手立て②

【道徳授業実践前後の児童の様子を見取り、生活の中で問題に直面したときに、意図的に自分自身に向き合う場面を設定する。】

(2) 抽出児童の選出

抽出児童A

学校生活の中で、ルールを守ったり、周りを見て行動したりするなどの基本的な力は備わっており、答えが一つで明らかなきときには発言する。しかし、自分の考えを伝える場面になると自信のなさや、間違えてしまったときに恥ずかしいという理由で、発言ができないことも多い。加えて、苦手なことがあると、消極的になり行動できない

い。

抽出児童Aに期待する姿

基本的には、普段の学校生活で支障が出ることはないが、自信が高められるように「自分の価値に気付くこと」や「困難にどう立ち向かうか」という点が育つことを期待する。できなかった経験に捉われすぎず、「できたこと」「努力したこと」をポジティブに捉えられるようになることで、安定した自己肯定感を育むことができる。

4 実践の様子

(1) 4年生7月の実践 主題「もっとよくなりたい」教材「マルガレーテ・シュタイフ」

①教材選定の理由

今回道徳の授業をするにあたって、「内容項目：A希望と勇気、努力と強い意志」を選択した。その中でも本時の教材「マルガレーテ・シュタイフ-テディベアを作った人-」では、1歳半で左手と両足が動かなくなってしまった、マルガレーテ・シュタイフ（以下マルガレーテ）がテディベアを作る会社を立ち上げるまでの生きざまから、努力をし続ける強い意志について考える。本学級の児童たちは6月の音楽発表会の練習でも意欲的に活動していた。中でも、休み時間を使って、ミニ学級演奏会を開いたり、児童同士でできていないところを教え合ったりしていた。しかし、個人で見ると、できないことを理由にさぼってしまったり、最初からあきらめてしまったりする児童もいた。そこで、この機会にあきらめないことの大切さを学ぶ本教材の実践を行った。



＜資料1 ミニ学級演奏会の様子＞

②授業実践

道徳の授業スタイルとして、児童自身が学びの深まりを実感し、実生活の行動につなげられるように、授業の始めと終わりに同じ発問をすることを統一している。本時でも教材に入る前の導入で、「あきらめず、目標を達成するためには、どんな考えが大切だと思いますか」と発問した（資料2）。すると、児童からは、「できるようになるまでがんばる」や「できなかったことを振り返って、できるようになるまでがんばる」といった、抽象的な考えに着目した意見が多く出た（資料2）。「がんばる」という意見が集中したために、話し合いの途中で具体的な「考え」に着目するよう「がんばるって考えかな」と切り返し発問をしたが、導入の段階では、具体的な「考え」に着目した意見が出ることはなかった。

発言者	授業記録
T	諦めず、目標を達成するためには、どんな考えが大切だと思いますか。
C 1	<u>できるようになるまでがんばる。</u>
C 2	<u>できるようになるまで練習する。</u>
C 3	できなかったことを <u>振り返って</u> できるようになるまで <u>がんばる。</u>
C 4	疲れたら休憩してやる。
C 5	お母さんにお手伝いしないとゲームできないって言われて、できるようになった。
C 6	<u>がんばって練習する。</u>
C 7	<u>疲れたら、休憩してまたがんばる。</u>

＜資料2 授業記録＞

教材を範読した後、1歳半で左手、両足が動かなくなり、車いす生活をしているマルガレーテの生活を意識させて、次の発問に入った（資料3）この話し合いでは、マルガレーテが幼少期に友達のペーターに算数を教えたことがきっかけで、車いす生活で普段助けられてばかりいる自分でも、人を助けることができたり、自分にも何かできることがあったりすることに気付かせたいと考えた。児童の意見を振り返ると、「助けられてばかりいる自分が人の役に立つことができる」や「これからも自分にできることをやっていきたい」など、ねらいに沿った意見が出てきた。それに加えて、役に立つうれしさが自分自身を奮い

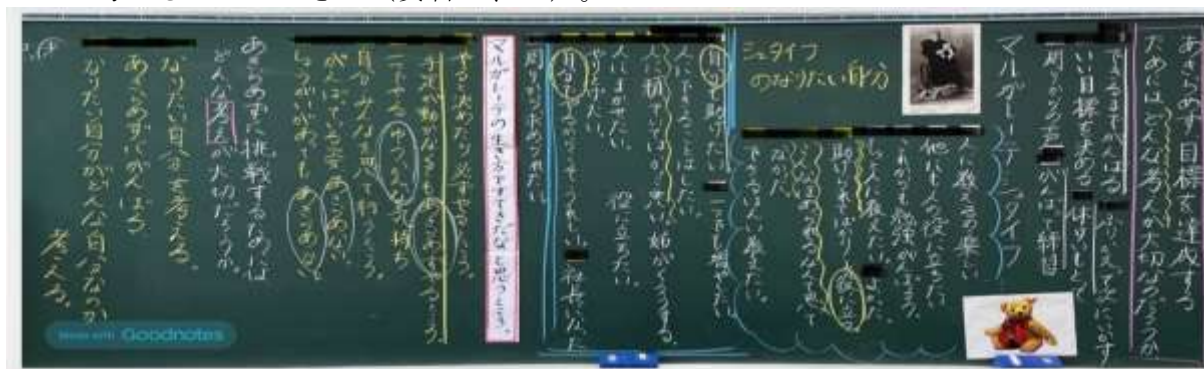
立たせ、さらに何かをするときの活力源になると考える児童もいた。ここでマルガレーテの幼少期の経験を押さえた上で、マルガレーテが慣れないミシンを必死に練習した場面について考えた（資料3）。マルガレーテが何度も何度も

練習をしたときの思いについて考えるときに、「一緒に裁縫を営んでいたお姉さんたちが、ミシンの練習をすればいいのではないか」「どうしてここまでマルガレーテが練習したのか」とゆさぶりをかけながら発問した。すると、「自分がやり切りたい」「人にやれることは何でもしたい」「自分でやるからうれしい」といった「自分」主体の考えが児童の口から多く出てきた（資料3）。これは、前に考えたマルガレーテの幼少期の経験の場面でマルガレーテ本人が不自由な体でも自分でやることができると実感したことを押さえたことで、他人ではなく、体の不自由がある「自分」でも何かできる、「自分」が何かしたい、やり切りたいと考えられたのだと思う。児童がこの場面でマルガレーテの考える「こうありたい自分」を押さえることができた（手立て①）。そして、主発問では「マルガレーテの生き方ですてきだなと思うところはどこですか」と、理由も合わせて聞いた。児童の意見の中で「続けていること」や「あきらめない」「不自由にも負けない」という言葉が多く出てきたところで、最後に切り返し発問「あきらめず、目標を達成するためには、どんな考えが大切だと思いますか」を聞いた。これは、導入で聞いた発問と同じである。導入の段階では、「行動」的な考えしか出なかったが、ここで児童たちは、「なりたい自分を考えることが大切」「なりたい自分がどんな自分かを考えながら取り組むことが大切」といった導入の段階では出てこなかった「考え」に着目した意見を話し始めた。また、その意見を聞いた周りの児童たちも「あー確かに」という声やうんうんといううなずきもあった。ここまでにマルガレーテの生き方に触れ、その考え方について話し合ったことで、児童も「どうがんばるか」ではなく、「どんな考え方」をすれば、諦めずに挑戦し続けることができるのかということに気付くことができた。児童Aも振り返りでは自分自身の生き方について「なりたい自分を考えれば、そこに向かってがんばることができる」と発言しており、教材から離れ、本時で学んだことを基にねらいを自分事

発言者	授業記録
T	ペーターの言葉を聞いて、マルガレーテはどんなことを考えましたか。
C 8	人に教えるってこんなに楽しい。
C 9	他にも人の役に立ちたい。
C 10	これからも勉強しよう。
C 11	もっと人に教えたい。
C 12	助けられてばかりいる私だけど、たまには、役に立つことがある。
C 13	いつも助けてもらっている私だけど、人の役に立って、褒めてもらえるなんて、思ってもみなかった。
C 14	算数を教えてよかった。
C 15	人に教えてうれしくなるなら、できる範囲でこれからもやりたいな。 (中略)
T	マルガレーテはどんな思いで何度も何度もミシンを練習したのだろう。
C 16	今までにたくさん助けてもらったから。
C 17	<u>自分もたくさん助けたい。人にやれることは何でもしたい。</u>
C 18	大人になるまで頼って生きてきたから、これ以上頼りたくない。
C 19	人に任せるばかりではよくない。
C 20	何かを <u>自分でやり切りたい。</u> ミシンが使えたら、周りに褒められる。
C 21	<u>自分もできることを一つでも増やしたい。</u>
C 22	<u>自分でやるからこそ、嬉しい。</u>
C 23	<u>みんなに助けてもらってばかりいるから、自分も助けないと意味がない。</u>
C 24	少しずつでもいいから無理せずできることを増やしたい。 (中略) (振り返りの場面)
c 25	なりたい自分になるために努力する。
c 26	あきらめずにがんばる。
c 27	なりたい自分がどんな自分なのかを考える。

＜資料3 授業記録＞

として考えることができた（資料3、4）。

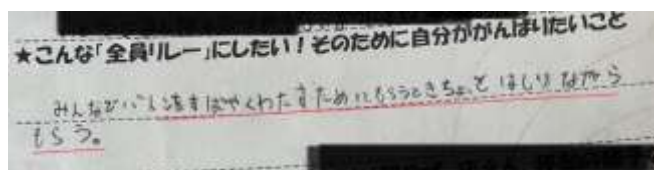


＜資料4 マルガレーテ・シュタイフ板書＞

③実践後の児童の様子

児童Aは算数が元々苦手であった。4年生の4月、5月頃を見ても、学習内容の理解に困難さを抱えている様子がうかがえた。しかし、6月、7月頃を境に、テストの点数も上がってきた。保護者との連絡の時に、そのことを伝えると「テストに向けて復習をがんばっている」とのこと。また、塾に通いだし、苦手をなくそうとしているとも聞いた。その話を聞いたときに、児童Aの中の、なりたい自分に向かって逆境を乗り越えたいという意識が伝わってきた。さらに、7月のマルガレーテの実践以降、国語や道徳の授業で、考えを発言する場面も増えた。それは、マルガレーテのなりたい自分を考える中で、自分自身の生き方にも当てはめることができたからだ考える。

夏休みが明け、運動会で行う学年リレーの練習が始まった頃に児童全員に運動会の目標を書かせた。児童Aはそこで学年リレーに向けて「バトンをすばやく渡すために走りながらもらおう」と自身の目指す像を考え、練習では、どうすれば走りながらもらえるかなどをチームで話し合う姿があった（資料5）（手立て②）。自己を見つめ、今の自分ができることを考えたことで、チームの練習にも生かすことができたと考え。



＜資料5 運動会の目標＞

（2）4年生2月の実践主題「正しいと思ったことは自信をもって」教材「よわむし太郎」

①教材選定の理由

冬休み明けから、みよし市全体で取り組んでいる8の字跳びの練習が始まった。8の字跳びの跳んだ回数を競い、みよし市の小学4年生全体で5位までに入れば、賞をもらえるということを伝えると、本学級の児童も「優勝を目指したい」と言って、練習に励んだ。最初の練習で、100回を超え、上々のスタートを切り、学級の雰囲気もよかった。しかし、2回目3回目の練習を行っても思うように記録を伸ばすことができなかった。練習当初の雰囲気から一転し、記録が伸びず、いらいらする児童、真剣に跳ぼうとしない児童、他のことに夢中になっている児童に強く当たる児童、一回のミスを大げさに責める児童など悪い空気が流れるようになった。その現状を変えるために、まずは児童一人一人が自分自身と向き合い、自分が正しいと信じることに自信をもって行動する必要があると考えた。児童たちに、今一度、自分自身に向き合い、何が正しいのかを自分で判断し、行動できるようになってほしいと考え、本教材を選定した。

②授業実践

本実践の導入として、「よいと思ったことを行うときに大切な心とはなんだろう」と児

童に発問した。最初に「優しい心」や「助ける心」など周りに対しての思いになってしまいう発言が見られたため、「よいと思ったことを行う心だよ」ともう一度、念を押して聞き返した。すると、「いいと思ったことを信じる心」「自分から行動する心」など自分に向き合った考えを話すことができた(資料6)。範読をした後、よわむしと呼ばれている太郎が、村のピンチのときに、との様に立ちはだかった気持ちについて考えるよう発問した。「大切な鳥だから殺してはだめ」「子どもたちが大切に育てたからだめ」といった考えが挙がった。児童が考えていることはとてもよい考えだが、太郎の恐怖と強い気持ちの葛藤も考えたかったため、ここで、「本当に俺がやってやるって思って前に出たのかな」と太郎の弱さに着目するよう、ゆさぶり発問をした。すると、「本当は怖い」「怖いけど、守らないといけない」と口々に言い、児童Aも級友の意見を聞いたことで、「こわいけど、鳥が守れなくなっちゃう」と太郎の葛藤を考えることができた

発言者	授業記録
T	よいと思ったことを行うときに大切な心とは何でしょう。
C 1	やさしい心
C 2	助ける心
T	よいと思ったことを行う心だよ。
C 3	いいと思ったことをやろうと思う心。
C 4	やろうと思ったことを信じる心。
C 5	自分から行動する心。

＜資料6 授業記録＞



＜資料7 よわむし太郎板書＞

(資料7)。板書も用いて太郎の気持ちの揺れを話し合うことで、立ちはだかっているけれど、本当は怖いという太郎の気持ちに共感することができた(手立て①)。次に、村や子どもたちを守ることができた太郎はどんなことに気付いたのかと発問した。「ぼくは勇気を出せたからもうよわむしじゃない」「人を助けるのはいいことだ」「笑顔を守れてよかった」「勇気を出して助けることができた」などの意見が挙がったので、ここで「勇気」に着目し、どうして太郎は勇気を出すことができたのだろうと切り返し発問をした。すると、児童Aが「命の大切さを知らないとの様に正しいことを伝えないといけない」と発言し、いくら身分の高いとの様でもやっていいことと悪いことがあるから、怖い気持ちはあるけれど、勇気を出して伝えないといけないという「正義」について考えることができた。ここで「正義」について考えられたことで振り返りの場面でも、「自分を信じる」「正しいと思ったことを信じる」といった発言が多く出た。児童Aも学級の話し合いを通して「自分の正しいと思ったことをしていきたい」と振り返りに書いていた。

③実践後の児童の様子

2月末まで8の字跳びの練習を粘り強く行った。その中で、記録が伸びないことの不安から、他者へ当たる児童の姿があり、学級の雰囲気もよくなかったので、以前行った「よわむし太郎」の実践を振り返りながら、「どうすればいいだろう」と児童たちに聞いてみた(手立て②)。すると、児童Aは「みんなで回数を数えよう」と学級に呼びかけた。続けて他の児童からも「失敗しても怒らない」「失敗しても続けよう」など肯定的な意見が出た。そういった言葉がけが学級にも浸透した。いらだちを隠せなかった児童たちも気持ちを切り替えて前向きに



＜資料8 8の字跳びの様子＞

取り組むことができた。また、学級の雰囲気も活気を取り戻し、さまざまな児童たちから、並び順や回し手を考えて決めたいと申し出があったので、時間を取り、リーダーを中心に学級で作戦会議を行った。その中で、児童Aは、連続で入れない子に対して「跳べる人たちの間に入れてタイミングを掴もう」と教えてあげたり、「全体的に跳べる人を最初と最後、跳べない人は真ん中ぐらいに入れたらいいと思う」と積極的に考えたりしていた。その結果あつてか、学級はみよし市内で見事5位を獲得することができた。最後、学級締めるときにもらった児童Aからの手紙には、「8の字跳びの練習が一番印象に残っている」と書いてあった。「一番印象に残っている」とあったため、どうしてそう感じたのか児童Aに聞いてみた。すると、「みんなで気持ちを一緒にして、できたし、自分も自信をもってできたから」と言っていた。このことから日々の学校生活や道德の授業などで自信がついたことで、児童Aに積極性がつき、学級へよい影響を与えることができた実感した。

(1) 成果について

①仮説に迫る手立て1

登場人物のなりたい自分像について話し合う場面を設けたことで、児童たちにも普段気付いているようで気付いていない自分像を考えることができた。また、登場人物の行動や気持ちに自分事として共感する児童もいた。共感することで、自分自身に当てはめて考えたときに、自分の失敗や成功を改めて考えるきっかけにもなったため、手立て①は有効であったと言える。

②仮説に迫る手立て2

内容項目Aということで、児童たち自身について考えた。集団ではあるが、児童一人一人それぞれ個性があり、考えも違う。また、児童たち自身、自分と向き合うということが難しい。そこで、手立て②では、日々の生活の中で困難に立ち向かうために、ワークシートや教師からの言葉がけを意識した。児童Aの様子からも分かるように、その時々で、自分に立ち戻り、どうすればいいのか考えることができた。また、その個として考え、行動に移したことが結果として、集団に活きるということも感じた。一人一人の個を高めることで、最後には大きな集団をつくることができたため、手立て②は有効であったと言える。

③まとめ

本実践は、特別何かしているという訳ではなく、普段の道德の授業に普段の学校生活に関わらせている。ただ、その中でも内容項目Aの自分自身に向き合うことで、「いつもより少し自信がもてた」「嫌だなと思っていたことだったけど、活動することができた」などと実感することができるということである。それには、道德の授業+普段の学校生活の場での教師の出が必要で、その場その場での支援が大切である。これからも道德の授業と普段の学校生活の中で、言葉がけや支援を行い、児童を支えていきたい。

(2) 課題について

道德の授業と日々の生活を見取っていったときに、児童Aは自分自身の成長、そして個の成長が学級へと広がっていったとても分かりやすいモデルであったと感じる。しかし、今回の実践を通して、児童Aの「行動」に着目しすぎてしまい、その「行動」に秘められている「心」にはあまり、焦点を当てなかった。道德の授業では、「行動」の裏にある「心」を考えることが大切である。授業だけでなく、普段の生活の中でも、どうしてそう思ったのか、どうしてそうしたのかなど、児童の心に寄り添った言葉がけを増やしていくことが今後の課題であると感じた。